東北女子大学・東北女子短期大学　紀要　No.50：113～118　2011

幼稚園における子育て支援
～幼稚園と家庭との連携のあり方について～

奈　　良　　裕 美 子*

The Child-Raising Assistance in Kindergarten
～ On the effect of cooperation between nursery school and parents ～

Yumiko NARA*

Key words : 子育て支援　Child-Raising Assistance
保育者　Childcare workers
連　携　Cooperation

はじめに

幼稚園は、親子にとって初めての社会参加であることが多い。親と子どもとの関係だけで精いっぱい生きてきた若い母親や父親、高学歴・高齢初出産の母親、子どもと過ごす時間が少ない親など、親としての役割についても十分な認識がない親もいる。

幼稚園と家庭との連携は、幼児の幸せのためだけでなく、家族の維持やその幸せのためにも必要とされてきている。連携を考える上で重要なことは、幼稚園という所は幼児が育つ場であるということ。家庭との連携に際しては、園ではどのように対応したらよいのかそれぞれの園の事情に合わせて考えていき、また園や保育者が親と真剣に向き合い、互いの思いを話し合い、園側がするべきことを明確にし、それを可能な限り誠実に行い続けるしかない。そして、親と向き合う際には、教師がカウンセリングマインドを持つこと、相手の立場や気持ちを肯定的に受け止めようとする保育者の姿勢が何よりも必要である。

家庭の連携にも、保育に必要なカウンセリングマインドと同様の保育者の温かな受容的態度が求められるのである。そして大切なことは、幼児の幸せのために保育者間で共通理解をはかること、保育者としての専門性を求め、努力を怠らないことである。

幼稚園という場は、何よりも幼児の幸せが優先されねばならない場ではあるが、大人たちにとっては自分たちの義務や使命を今一度自分の行動に照らして問い直す場でもある。たくさんの問題が生じ、園と親が行き違うことも多い昨今であるが、保育者と親が共に理解し合い、幼児一人一人の幸せを願い、手を携えて問題を乗り越えていかなければならない。また、園という場で幼児のために展開される保育の営みについては、親からの十分な納得と信頼を得なければならないし、それらを抜きには望ましい連携はあり得ないのである。

幼稚園は、幼児も親も育つ場と言える。乳幼児期は、園と家庭が協力して子育てをしていくことが求められ、保護者とのコミュニケーションは何よりも大事である。

家庭とのコミュニケーションをはかる手段としては、連絡帳・個人面談・家庭訪問・保育参観・いろいろな行事に参加することなどがあげられる。特に、「連絡帳」は、一人一人の子どもの様子や育ちを確認しあい、双方が意見交換できる。親からは家での子どもの様子、保育者からは園での様子やその日の出来事、大事な連絡事項などを伝えるものであり、毎日のかけ橋となっている。また、子ども一人一人の理解を深めていくため、信頼関係を築くためにとても大事なものである。

母親が安心感を得るために幼稚園がすべきこと

＊東北女子大学

は、保育をもっと保護者に見てもらい何らかの形で保育に参加する機会を多くしていくことであると考える。子育てに無関心の保護者や、反対に教育熱心な保護者も多いが、一人でも多くの保護者が子育てについて気楽に語り合い、子育てを楽しめるような環境作りを幼稚園でも考えていく必要がある。幼稚園という教育機関が、家庭との連携の工夫を図ることは今や幼児のみならず、家族全体の幸せに通じるのである。

筆者は保育の現場で様々な子どもたちへの支援の難しさを何度か経験した。家庭に対する園からのサポートや、連携の工夫などのいくつかの事例を紹介し分析する。

研究方法

1．対象

【事例1】3年保育3歳児男児について（A男）
担任保育者1名、副担任1名

【事例2】3年保育3歳児男児について（B男）
担任保育者1名、副担任1名

2．方法

記録は筆者が2006年4月8日～2007年3月23日まで保育日誌、連絡帳、その他の保育実践記録等をもとに記述したものである。

【事例1】3年保育3歳児　A男について

（4月8日 入園式）

入園式当日、A男は両親と一緒に幼稚園に来るが、玄関で泣き出し上靴を履くのを嫌がっていた。

3歳児クラスの部屋に来た途端にA男は走って逃げる。母親はホールや図書室、玄関へ逃げ回るA男を追いかける。その後ようやく部屋には入ったもののずっと泣いていた。

入園式開始15分前、A男を母親から離そうとすると大声で泣き叫び保育者の足を蹴り、叩くなど大暴れする。

A男　：「いやだ！いやだ！」と大声で泣き叫び暴れている。
A男母：どうしたらいいのか心配そうに見ている。
T　　：「大丈夫ですよ。どうしてもだめならA男君と一緒に居てあげて下さい」
A男母：涙を浮かべながら心配そうにA男を見ている。

式終了まで母親から離れずに参加する。保育者は時々声をかけるが、A男は保育者の方を見ようとはせず、母親に抱っこされたままであった。保育室に戻り、帰り支度をする時も何をするのにも嫌がるA男に母親は困り果て、声をかけることも追いかけることもしなくなっていた。

A男母：帰り際に「大丈夫かなぁ…」と不安そうにつぶやく。
T　　：「大丈夫ですよ。皆初めてですからね」

（4月10日1日目）

A男は朝の通園バスの中で大声で泣き叫び保育者に抱きかかえられてくる。帽子は被らず通園かばんも持たない。ジャンパーは脱ごうとせず着たまましばらく泣く。

T　　：「おはようございます。A男君よく来たね。
ジャンパー脱いで遊ぼうか」と言い脱がせようとする。
A男　：「いやだ！いやだ！お家に帰る！」と大声で泣き叫ぶ。ほとんど泣いて過ごす。

（4月12日3日目）

T　　：手をつなぐことも抱っこすることも嫌がるので、順次登園してくる子達にかかわりながらA男の様子を見る。昨日、年長児が持っていたレゴブロックに興味を示し、遊んだことを思い出し、「今日もレゴブロックで遊ぼうか」と声をかけるが、「いやだ！」と言ってまた泣く。
A男　：しばらくして泣きやみ、周りの様子を見るようになる。年長児が持っていたレゴブロックを見て「あれ」と指をさす。
T男　：A男が初めて興味を持ったレゴブロックを見に年長組の保育室へ行こうと誘う。
A男　：初めて保育者の手をつなごうと手を出す。

A男と保育者は年長組のレゴブロックを借りて遊ぶ。数人の年長組の男女が来て「先生、A男君遊びたいんでしょ。遊んでもいいよ」とA男を連れて行くとすんなり遊びに入る。この日はおむつをしてきたが、声をかけても「いやだ！」と言ってトイレにも行かず、保育者の誰にも触らせずそのまま降園する。

T　：降園後、A男の母親と初めて電話で話し、おむつを替えないまま帰してしまったことをお詫びする。
A男母：「すみません。A男はどうしていますか？」
T　：「大丈夫ですよ。幼稚園に着いてからも泣いていますけど、遊ぶようになりましたよ。ちょっと時間はかかると思いますがゆっくりかかわっていきますので、お母さんもたいへんなことがあるかもしれませんが、少しずつ慣れてくれるように一緒に頑張りましょう」

（4月13日4日目）
大声で泣き叫び、保育者を叩いたり髪の毛を引っぱったり大暴れで登園する。保育室に入ると遊びにすんなり入るようになるが、トイレには行かずおむつも触らせない。クラス活動になるとロッカーに入ってしまう。
A男　：年長組のレゴブロックでは遊ばず、他の遊びを傍観している。クラス活動になり、自分の椅子には座らずロッカーに入ったきり出てこない。
T　：「今日は何のお話かな…？」A男の様子も見ながら絵本の読み聞かせをする。
A男　：初めは興味を示さなかったが、ロッカーからちょっとずつ出てきて立ってみている。
読み聞かせが終わるとまたロッカーに入ったまま出てこない。
T　：A男が降園してから、A男の母親とA男の朝の様子、園での様子、家での様子についてなど電話で話す。A男の母親はとても不安になりながら毎日の登園を心配していたため、不安を取り除くように、少しの変化を伝えるようにし、ゆっくり時間をかけてかかわっていくことを話した。「何かわからないことや不安なこと、またA男君が変わったことなどを連絡帳にてお知らせ下さい」と協力を求めた。

（4月19日9日目・4月生まれの誕生会）
A男は4月生まれ（4月1日生まれ）で、誕生会では主役で出ることになっていたが、バースデーカードの手形はやらない、プレゼントもいらない、「誕生会いや！」と言い結局参加しなった。
A男母：4月20日連絡帳より
「やっぱり誕生会には参加しなかったのですね。今は何もかも全ていやと言っています。調子が出るまでそっとしておこうと思っています。
でも、幼稚園に入園してできるようになったことが2つありました。家に帰ってスニーカーを自分で脱いでそろえること、うがいと手洗いをすること。自分で進んでやったことがとても嬉しかったです」
T　：「そうでしたか。良かったですね。自分でやろうとするところはえらいですね。幼稚園でもできることが増えたらA男君の自信につながると思いますので、ゆっくりかかわっていきたいと思っています。
今日は久しぶりの登園でしたが泣くこともなく遊びにすんなり入っていましたが、お弁当は嫌だと言って食べませんでしたので、そのまま持たせます。
今日は初めての経験が多かったこともありいろいろ取り組めなかったようです。
誕生会ですが、いろいろ試みたのですが参加することができず申し訳ありませんでした。もう少し様子を見てバースデーカードが完成して持ち帰る日が来ることを楽しみにどうぞお待ち下さい」

4月24日
・昼食時、皆が食べている様子をロッカーから見ている。「ごちそうさま」の後、ロッカーから出てきて初めて給食のパンだけ食べる。
4月25日
・朝は泣かずに登園する。
A男　：昼食時K男に“A男君、食べなさ

い！”と言われたことに怒り、K男にパンチをする。
K男　：しくしく泣いている。
T　　：「K男君泣いちゃったね。痛そうだね。どうしたのかな…？」K男にパンチをしたこと、皆と一緒に食べることを促すが、聞いていない。
A男　：「この人ダメ！いじわる！この人きらい！」と言いK男に指をさしながら怒っている。
T　　：あまりおだてすぎるのもよくないと考え、構わず様子を見る。

4月26日
・A男はおむつからトレーニングパンツに履き換えるようになる。

4月28日
・A男は泣かずに登園する。
・名前を呼ばれて初めて「はい」と返事をする。

5月10日
A男　：お昼に「いただきます」の挨拶は言わなかったが初めて皆と一緒にお弁当を食べる。

6月13日
T　　：降園準備で「今日も行かないのかなぁ」と呟いたことから、A男は「行く！オシッコする！」と言い、A男について行く。
A男　：初めてトイレへ行く。しばらく粘ったが出なかった。

6月14日
A男　：「トイレ行く！」と言い、初めて一人でできたことに喜び、初めて笑顔を見せる。
T　　：A男についていき傍で見ている。一人でできたことを一緒に喜び頭をなでる。

【考察】

A男の家族にとって初めての社会参加となる入園式であるが、A男の行動に親は戸惑い、どうすることもできない状況であった。親も不安でA男にかける言葉もなくなっていた。泣いて登園することは予想していたようだが、それが長期間続くということは想像していなかったようである。

保育者は入園式のA男の様子から、A男とのかかわりと親への支援を考える。A男の興味や関心を知り早く理解すること、また親との信頼関係を築けるように「連絡帳」と「電話連絡」を通して連携をはかることを心がけなければならなかった。時に「連絡帳」は誤解を与えることも考えられるので、内容によっては「電話連絡」にするなど、状況に応じて配慮点は考えられる。

A男は緊張と不安が強く、周りの子どもたちや保育者とのやりとりを嫌がった。A男自身素直になれず、声をかけても怒り何事にも受け入れられずに嫌がるということは、警戒心がとても強いと推測される。

A男にとって幼稚園という新しい環境は、同年齢の子どもたちや親たち、保育者、見たことのない人達の集まる場所として怖い場所という印象があり、居場所のない孤独な空間の中で過ごす不安感があったと考えられる。

A男の母親は、通園バスに乗るのを嫌がること、お弁当を食べないこと、いろいろな行事など全てにおいて“いや！”というA男に苛立ち、A男に強く言ったり叱ったり無理にやらせようとする焦りがあったと推測されるが、母親と電話で話すことや連絡帳でのやりとりを通して少しずつ落ち着きを取り戻し、またどうしたらいいのかわからずアドバイスを求めるようになる。保育者との話し合いによって母親の気持ちが変わり、協力的になる。そうした母親の変化が結果としてA男の変化につながったと思われる。

【事例2】 3年保育3歳児　B男について
（4月8日 入園式）
入園式当日、B男はにこにこしながら母親と幼稚園に来る。母親に言われたことはしっかり行いできることが多かった。B男の母親は無表情でB男との会話はない。

（4月14日）
入園式から1週間が経ち、3歳児クラスはまだ園生活に慣れず落ち着かないが、それぞれ好きな遊びを見つけて遊ぶようになる。

Ｂ男　：１日目からはりきって登園していたが、慣れてくるにつれていたずらが目立つようになる。
Ｂ男　：積み木を高く積み上げて「みてーっ！高いよ！」「みてみてー！お家できた」と遊んでいる女の子達のところへ行き、手で倒し全部壊す。
Ｃ子　：「あー壊した。だめなんだよ」と怒ってＢ男をにらむ。
Ｔ　　：Ｃ子の強さからＢ男に対しての態度がどう出るのか、どのようなやりとりをするのか見ていくようにする。
Ｂ男　：Ｃ子の胸を押して倒したり、コンテナーに入って遊んでいたＣ子をコンテナーごとひっくり返したり、手あたりしだいいたずらをすることが目立つ。
Ｃ子　：我慢をしていたようだが、遂に泣く。
Ｔ　　：「Ｂ男君、どうしたのかな？Ｃ子ちゃん達ここで遊んでいたんだけど、Ｂ男君も遊びたかったの？Ｃ子ちゃんなんかやったの？」Ｃ子達の遊びを壊された気持ち、痛かった気持ちを代弁するようにした。

（５月19日）
Ｂ男　：朝の遊びで満３歳児のＩ男と遊んでいた。
Ｉ男に急に抱きつかれ左頬を噛まれ大声で泣く。左頬には噛まれた痕が残っている。
Ｔ　　：二人は一緒に遊んでいた。抱きついたのは一瞬の出来事であったため、どうして噛まれたのか状況がわからず、Ｂ男の頬を冷やしながらお互いの話を聞く。
Ｂ男　：降園時にはだんだん腫れてきて、消毒と軟膏をつけて帰す。
Ｔ　　：お迎えに来た母親に状況を説明する。
Ｂ男母：「これはひどすぎます！」と怒り、Ｂ男を連れて帰ってしまう。
Ｔ　　：Ｉ男の母親に電話で状況を説明する。Ｂ男の母親の怒った態度を伝えるが、Ｉ男の母親も不安にならないようアドバイスをする。
Ｉ男母：「ご迷惑をおかけしてすみません。今すぐＢ男君のところへ電話してみます」
しばらくして、Ｉ男の母親から電話がくる。

Ｉ男母：「Ｂ男君はずっと留守で、７時過ぎにやっと連絡がつきました。病院に行ったそうです。お詫びしても返事はなく、“はい”と言うばかりで…。大丈夫でしょうか？」
Ｔ　　：「大丈夫です、心配ないですよ。またお会いした時にでもお話してみたらいかがですか。逆の立場になる時もありますので」

（６月９日 個人面談）
ホールで裸足になり雑巾がけをしていた時、支えている手が滑り床に額をぶつけてしまい腫れる。その後冷やして様子を見ていたことを母親に説明する。
Ｔ　　：「今日は申し訳ありませんでした。その後大丈夫ですか？」
Ｂ男母：「まだ赤いですけどたぶん大丈夫だと思います。どうしてぶつけるんでしょうね」とつぶやく。
Ｔ　　：「最初はゆっくり行っていたのですが、慣れてくるとだんだん速くもなってきますし、中には競争する子も出てくるんですよ。Ｂ男君も上手になってきたのではりきりすぎてしまったようですね。申し訳ありません」

Ｂ男の母は話を聞くものの反応があまりない。

【考察】

Ｂ男は元気に登園していたが、Ｂ男の母親は無関心でＢ男の園での様子を尋ねることはなく、Ｂ男の変化を保育者が連絡帳を通して伝えるが反応がなく、返事がない。また、Ｂ男は幼児音があり言葉を上手く話せないこともあり、言葉の問題や子ども同士のかかわりに関してはあまり気にせず、協力を求めても反応がない。

Ｂ男の指しゃぶりが多いことや、落ち着きがない行動は、母親とのかかわりが影響されていることが考えられ、Ｂ男への期待が強く「○○しなけ

ればならない」という意識で育児に臨んでいることが推測される。

【総合考察】

どちらの事例もほんの一部を記述したものであるが、本研究を通じて、A男のように活動に参加せず気になる子、B男のように身体的に気になる子の育ちを促す上では、発達に合わせた配慮が必要であり、環境へのかかわり、集団の中での子どもたちとのかかわりを通して「感じる力」「行動する力」を養う上で「体験する」ということが重要であるということがわかる。

また、A男とB男の母親は園のいろいろな行事に参加することで情報を共有し園での様子に関心を持つようになる。そして、保育者とのやりとりを通して子どもと一緒に成長している様子が見られた。

一人一人の子どもたちを大切にする保育は、個別的な保育により「援助する」「支援する」「展開する」ための配慮を行えることで、A男・B男の成長の変化につながると考えられる。

自我が発達するこの時期の子どもは、自己を主張し、自分の力を試す機会を持つことで自立の力を培っていくものだが、親の方はこうした子どもの主張や行動を受け入れ難いようである。特に「いや」を連発し大人からの指示をことごとく拒否し始める２～３歳の時期は親子関係の危機が生じやすい。親はこの危機を乗り越え、子どもを対等な存在だと認識できるように子育てや発達についての理解を促すことも大切である。子どもは自らの意志で、外の世界との関係を築き、親から自立していく存在である。しかも、子どもは独立と依存の葛藤を繰り返しながら自立の一歩を踏み出していく。わがままを言ったり、ぐずったり、乱暴になったり、反抗的な行為に込められた子どもの発達要求をしっかり受け止め、親自身も節目を一つ一つ乗り越えていけるように親をも支えることが大切であると考える。

人間関係の希薄化、核家族化の進行による育児伝承の欠如、子育て情報の氾濫などにより、子育てをめぐる不安や孤立感の高まりなど、様々な問題が生じてきており、幼稚園がより積極的に子育て支援をしていくことが求められている。

【参考文献】

・小田 豊（2002）　子育て支援・預かり保育
　チャイルド本社
・垣内 国光、櫻谷 真理子（2003）
　子育て支援の現在　　ミネルヴァ書房
・岩崎 苑子、鈴木 牧夫（2004）
　幼児理解と教育相談　　玉川大学出版部
・秋田 喜代美（2010）　保育のおもむき
　ひかりのくに